

後二條天皇 北白河陵外構柵その他整備工事に伴う立会調査

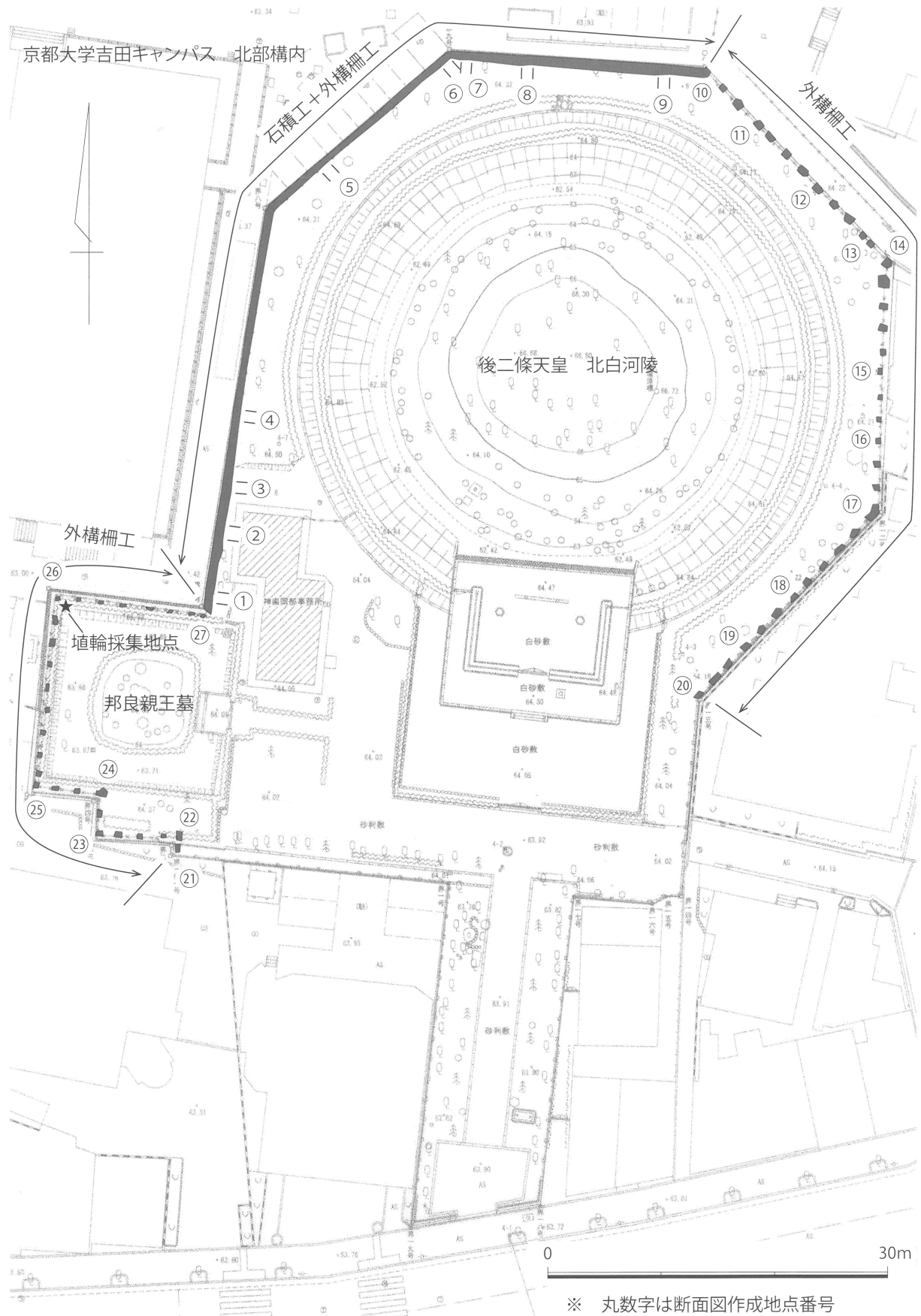
第94代後二條天皇の北白河陵は、京阪電気鉄道鴨東線／叡山電鉄叡山本線の出町柳駅から東へおよそ1.1km、吉田山の北西、京都府京都市左京区北白川追分町に所在する。同じ陵墓地内には、天皇の皇子で、第96代後醍醐天皇の皇太子であった邦良親王の墓がある。また、京都市内の陵墓のうち、おおむね左京区の岡崎以北一乗寺以南と上京区の東半を管轄する、月輪陵墓監区神楽岡部の事務所もある。陵墓地の北側から西側は京都大学吉田キャンパス北部構内に隣接しており、陵墓地全域は、縄文時代から近世に至る複合遺跡である「北白川追分町遺跡」に含まれているほか、近くには「追分町古墳群」が所在する⁽¹⁾。治定は元禄のことであるが⁽²⁾、「幕末の修陵」以前は、田地の中に大小二つの円丘があり、大きいものは「泓塚（ふくつか／ふけつか）」あるいは「福塚（ふくつか）」、小さいものは「車塚」と呼ばれていたという⁽³⁾。

今回の工事は、当陵墓地のうち、老朽化していた北白河陵の墳塋部周囲及び邦良親王墓周囲の外構柵の改修にあわせ、京都大学敷地との段差に設けられていた石積を改修するものであった（第20図）。工期は令和6年8月2日～令和7年1月10日で、その間は月輪陵墓監区事務所の松村一成、山室亮介が現地調査を担い、適宜、同事務所の坂井洋介、岩槻知樹の応援を得た。陵墓地の周囲は北東から南西にむけて緩やかに傾斜しているが、もっとも旧地形との標高差が少ないと予想された北東辺から東辺の掘削にあわせ、令和6年10月21～25日の間は陵墓課の有馬 伸が参加した。なお、有馬滞在中の10月24日には、歴史学・考古学関係17学・協会代表者への現場公開をおこなった。

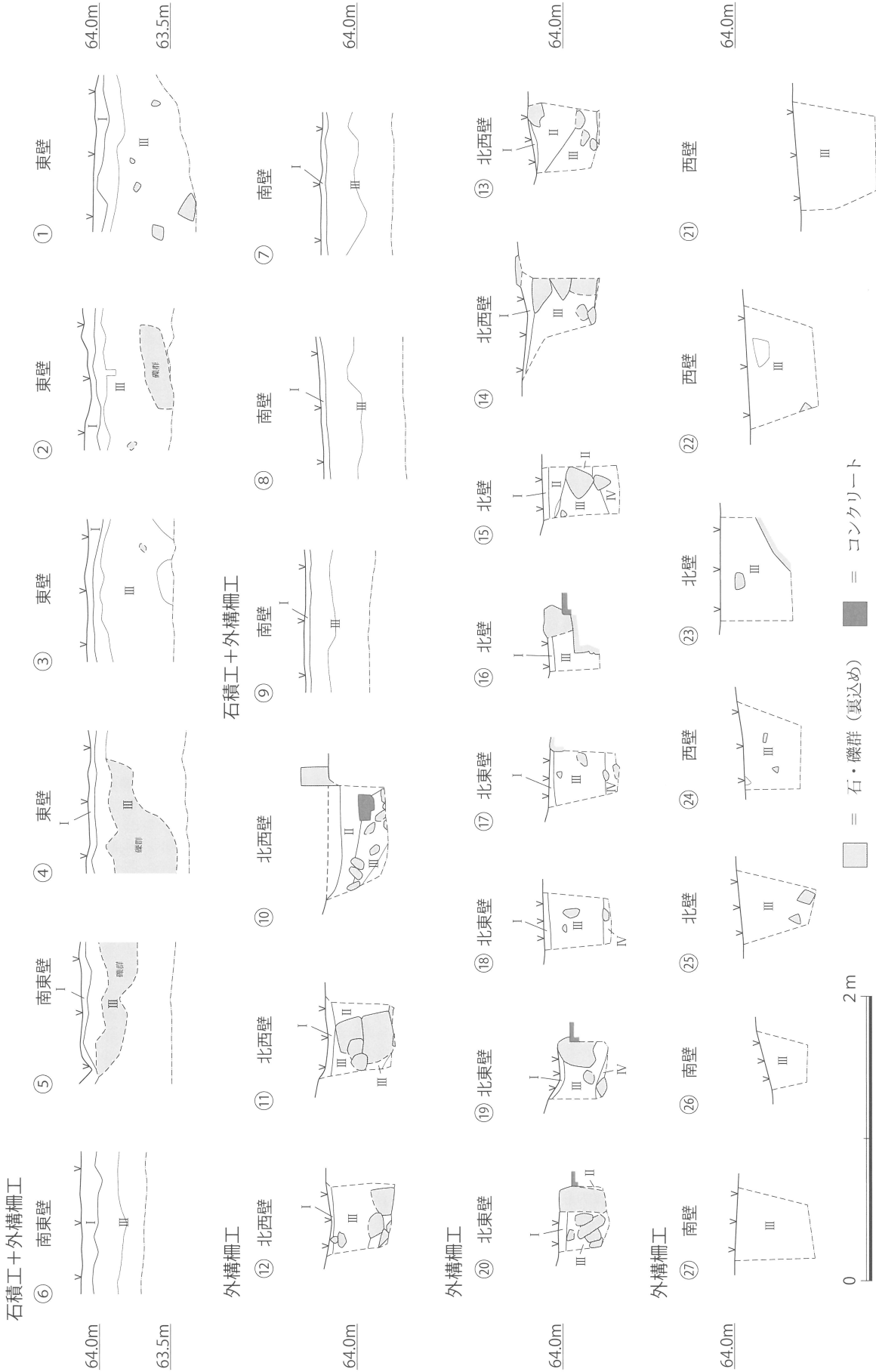
今回の掘削箇所での土層は、その性格から大きく4層に大別できる（第21図）。Ⅰ層は表土層。Ⅱ層は、陵墓地外周を巡る水路を埋立てたものなど、現代の整地土。Ⅲ層は、近代以降の陵墓地整備に伴う盛土。Ⅳ層は、陵墓地の整備によって埋められた周囲の土の可能性のあるものである。当陵墓地が、「幕末の修陵」以降に大きく拡張され、整備されたことは、いわゆる『文久山陵図』⁽⁴⁾と陵墓地形図⁽⁵⁾を比較すれば明らかであるが、Ⅲ層はそうした整備に伴うものである（図版24-1～7）。平成21年度の神楽岡部事務所改築工事に伴う立会調査の報告でも同様の指摘がなされている⁽⁶⁾。陵墓地北東側から南東側の掘削箇所（⑩～⑳）では、現状ではほとんど見えなくなっている間知石による石積および石列を確認しているが、この石積、石列は初版の陵墓地形図には周辺を巡る水路の側壁として記載されており、周囲の開発によって埋め立てられてしまったものである（図版24-3～5）。一部で確認できたⅣ層は淡灰褐色土層で、陵墓地の拡張整備以前に遡る可能性があるが、掘削範囲が狭小であったため確定はできない。

今回の掘削範囲においては遺物の出土はなく、保存するべき遺構もなかったため、工事は予定どおり施工された。

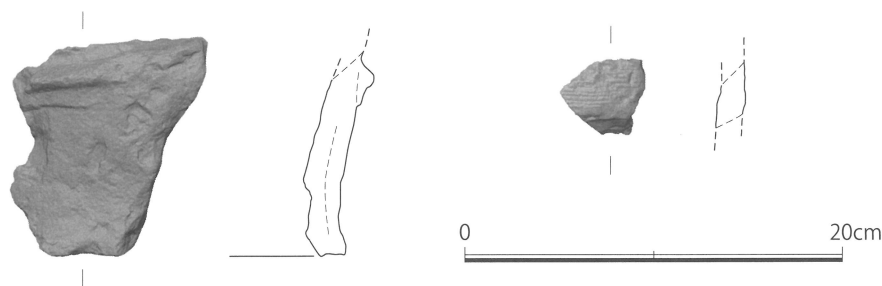
なお、調査での遺物出土はなかったが、邦良親王墓の北西隅で埴輪片を採集した（第22図⁽⁷⁾、図版24-8）。学・協会代表者への現場公開終了後に京都大学の敷地から石積工箇所を見学していた参加者から、柵の内側に埴輪片のようなものが見えていると声をかけられ、現地に赴き採集したものである⁽⁸⁾（第20図★印）。採集したのは接合しない2片で、表面にはコケが生えており、かなりの期間露出していたようである。2片とも表面は薄い桃色を呈し、断面はさらに白みがかかった桃色で、穴窯焼成である。1は円筒埴輪の底部片で、わずかに残る底面には何らかの圧痕があり、付近の外表面は外側に歪む。内外表面とも風化が著しいが、外表面にはわずかながらヨコハケが認められる。突帯は断面が三角形で、残存部分では底面と並行になっておらず、大きく波打っているものと思われる。破片の端では突帯が大きくくぼんでおり、こちらも何らかの圧痕と思われる。突帯下方の外表面には横方向の段差があり、ヨコハケの際の工具の端部によって生じたものであろう。破片上端の割れ口は外表面から内面に向かって下がっており、粘土紐接合部での剥離を示す。2は円筒埴輪の胴部片で、ヨコハケが残る。破片の上端、下端とも割れ口は傾斜しており、こちらも粘土紐の接合部で剥離したものであろう。この埴輪がどの古墳に伴うものであるかを考えるとき、真っ先に思い浮かぶのは、古くから円丘があった邦良親王墓、あるいは北白河陵であろうが、これまでに墳塋上で埴輪を採集するという事例



第20図 北白河陵 掘削箇所位置図(1/500)



第21図 北白河陵 掘削箇所断面図(1/40)



第22図 北白河陵(邦良親王墓) 採集品(1/4)

はない。また、すでに述べたように、採集地点は陵墓地整備により造成されている区域であるため、むしろ外から持ち込まれた盛土内に含まれていた可能性の方が高いとも思われる。なお、陵墓地北側の京都大学敷地内で埴輪片がまとまって出土しており⁽⁹⁾、それらと関係している可能性がある。(有馬 伸)

註

- (1) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「京都市遺跡地図提供システム」
<http://keikan-gis.city.kyoto.lg.jp/kyotogis/iseki/main>
- (2) 松平信庸『歴代廟陵考』、元禄12年(1699)。
『歴代廟陵考』の写本は多数存在しているが、当部図書寮文庫で所蔵するもののうち、柳原家所蔵本の写本(函架番号:柳・979)、および京都府庁所蔵本の写本(函架番号:陵・785)については、『書陵部所蔵資料目録・画像公開システム』(<https://shoryubukunaicho.go.jp>)において閲覧可能。
- (3) 谷森善臣「山陵考」、慶応3年(1867)(外池昇編『文久山陵図』、新人物往来社、2005年、所収)。
上野竹次郎編『山陵』、名著出版、1989年(原典は、山陵崇敬会、1915年)。
- (4) 鶴澤探真「後二條帝 北白川陵 荒蕪」/「後二條帝 北白川陵 成功」(外池昇編『文久山陵図』、新人物往来社、2005年、所収)。
- (5) 帝室林野局「後二條天皇北白河陵 邦良親王墓 之図」、昭和3年測量、同4年製図(宮内庁書陵部陵墓課編『宮内庁書陵部陵墓課所蔵 陵墓地形図集成』、学生社、1999年、所収)。
- (6) 清喜裕二「後二條天皇 北白河陵神楽岡部事務所改築工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第62号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2011年。
なお、陵墓地敷地がほぼ現状のようになったのは大正6年の土地買い上げによるものと思われるが、土地取得やその後の陵墓地整備に関する公文書は、綴じられるべき簿冊が前後の年度とともに抜け落ちているので、関東大震災により焼失しているものと思われる。大正6年に土地を取得していることは下記の歴史的公文書で確認できる。
「第三號 後二條天皇北白河陵外一ヶ所地籍確定ノ旨陵墓監へ通牒ノ件」諸陵寮『陵墓地録 昭和7年』(宮内公文書館所蔵、識別番号:8571)。
- (7) 第22図に掲出している出土品図のうち、三次元計測図は、MIRACO Pro 3Dスキャナー(Revopoint社)により作成したものである。この三次元計測図作成では、陵墓調査室 的場匠平氏の手を煩わせた。感謝の意を表したい。
- (8) うかつにも情報を提供していただいた方のお名前を何うのを失念していた。貴重な情報を提供していただいた方に感謝の意を表するとともにお詫びしたい。
- (9) 伊藤淳史・富井 真「京都大学北部構内BC30区ほかの立合調査」笹川尚紀編『京都大学構内遺跡調査研究年報』2016年度、京都大学文化財総合研究センター、2018年。
なお、近くの京都大学敷地内で埴輪が出土していることは、京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター 伊藤淳史氏よりご教示いただいた。感謝の意を表したい。



1 ②地点（南西から）



2 ⑤地点（東から）



3 ⑪地点（南西から）



4 ⑯地点（南から）



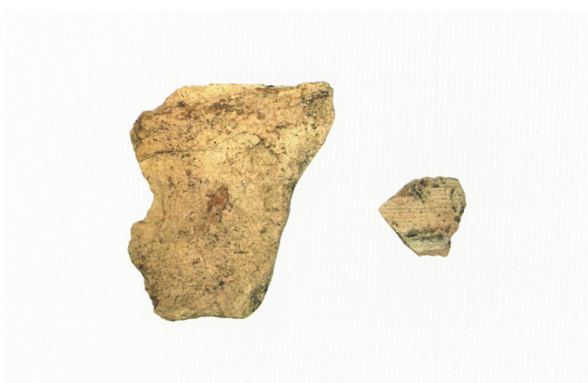
5 ⑳地点（南西から）



6 ㉔地点（南から）



7 ㉖地点（北から）



8 邦良親王墓採集品 埴輪